

エピソード3 「こんなに辛い人生ならば、死んでしまいたい」

健一、53歳男性。地方公務員。特に秀でたところがあるわけではなかった。顔面と右腕には、幼いころ天ぷら油をかぶってできた火傷の瘢痕が今でも残っていた。運動も苦手で、駆けっこではいつもビリだった。取り柄といえば、真面目で穏かな性格だけだった。高校を卒業したあと、なんとか障害者枠で地元の区役所に就職することができた。

30歳のときに職場で知り合った女性と結婚し、一人娘の**N海**が産まれた。「自分と結婚してくれる女性などいるはずがない」と思っていた健一は、初めて幸せというものを知った。間もなくして健一の家は、妻と娘の笑い声がいつも響くようになった。それから20年あまり、平凡だがささやかな喜びに満ちた人生を送っていた。

人生の転機が忍びよってきたのは、50歳を過ぎたころだった。1年前に妻の乳房に癌が見つかった。既にリンパ節に転移しており、治癒は到底期待できなかった。妻は「死にきれない」と何度も言いながら、半年後に息を引きとった。

「ステージ4にしては頑張ったほうだよ」

健一が病院をあとにするとき、背の高い白衣の男が若い看護師につぶやくのを聞いた。

妻の死から数ヶ月が過ぎた真冬のある日のこと。警察からの電話を受けたとき、健一は何のことだかさっぱりわからなかった。その日の朝、N海が通勤電車で飛びこんで命を断った。N海は就職してからなかなか仕事を覚えられず、上司の**B男**の理不尽な振舞いにも悩んでいた。

「ちっ、この忙しいときに」

B男は、部下の自殺を聞いたとき職場でそうつぶやいたという。健一は、そのことを人伝に聞いた。

ごく親しい身内だけでささやかな葬式をあげた。生前ふくよかだった娘の身体は、ものの30分もしないうちに、炎に焼かれて灰色の骨だけになった。健一は、長いあいだ無言で灰を見つめていた。見かねた姉が、手際よくN海の骨を拾って骨壺におさめた。

1週間後に忌引から職場に戻ってきたとき、役場の同僚たちは健一の姿をみて驚いた。顎には雑草のような無精髭が生え、目は死んだ魚のように澱んでいた。

健一が仕事から帰宅しても、家の中はひっそりと静まりかえっていた。空家のような自宅で、一日中ぼーっとしていた。何も食べる気がせず、御飯を口に入れても砂を嚙んでいるようだった。布団に入ると毎晩のように幼いころの娘が枕元にあらわれた。小学校にあがるとき、娘はミッキーマウスの高価なランドセルを欲しがった。そのランドセルを買ってあげなかったことを、悔んだ。

それから数週間経ったある日。勤め先から「1週間も無断欠勤している」という連絡を受けた姉が、あわてて健一の様子を見にきた。玄関をあけると、健一は尿臭漂う敷布団の上でミイラのように横たわっていた。そして、か細い声でつぶやいた。

「このまま死なせてくれ」